

『ノンシュガー』

作者 浅羽一

彼はサトウ。私はカシモト、略してカシ。だから私たちが一緒になった時は、ずいぶんとからかわれたものだ。曰く、「甘いね」とか、「あんまり熱いと溶けちゃうぞ」なんて。

でも、正直な所、私はそれに毎回「もう良いって」と返しながらも、密かに嬉しくなっていたりもした。バンド名を『Candy』にしようと提案したのは、彼でなく私の方だった。彼はちよつとばかり照れくさそうな顔をしたけれど、それ以上は抵抗もせずに入れた。二人きりのメンバーの間に恋愛関係など成立してないと理解しつつも、私はそれに心が弾んで、そしてバンド結成後、初の曲はわずかに二時間で完成した。

しばしば驚かれるのだが、ボーカルを担当していたのは彼で、私の役割はピアノ（またはキーボード）だった。楽曲はいつも、まず私が曲を作り、それから彼が、或いは私が詞を書いた。変に思われるかも知れないが、男性目線の歌詞は私が、女性目線の歌詞は彼が担当した。特別に話し合っつてそうしようと決めたわけではなかったが、おそらく、それが最も客観的で、かつ理想的な作品を生み出すのに適していると、オリジナル曲が三つほど出来た頃には互いにそう感じていた。それに、それぞれの書いた詞に対して、男性や女性の代表を気取って駄目だしをする作業は、色々な発見もあつて楽しかった。

私たちは、上手くいっていた、とても。実際、三歳の頃から十四年間続けていた私のピアノと、ほとんどクラシック一筋だった私をあつさり方向転換させてしまった彼の歌声は、素人の高校生コンビでありながら、私鉄の駅前でライブをやるたびにそれなりの聴衆を集められた。いつしか、休日など普段以上に人の集まりそうな時は、あらかじめ最寄りの交番に届け出ないと中止させられてしまうこともあった。

放課後、運動場の元気が僅かに届く裏門の前で待ち合わせをして、ふと見上げればれつと庭の木が道路にはみ出しているような住宅街を駅へと向けてとことこ歩く。クラスメイトたちは正門から商店街へと伸びる道すがら、コンビニに寄ったり、愛想の良いおばちゃんがいる総菜屋の店先でコロッケにするかキャベツ焼き（小さなお好み焼きみたいなものだ）にするかはたまたダイエツトという苦渋の選択をするか悩んだり。それはいかにも高校生っぽくて、アーチ状のゲートの下で行き交う自転車をよけながら、結局は「熱い、熱い」と文句を言いつつキツネ色の小判型にかぶりつく友人らの姿は魅力的だったけれど、私にとってはやっぱり一メートル半ほどの距離を置いて彼と歩く時間が一番だった。

壁に赤茶けたタイルを貼り付けられた駅ビルの前で、白いタイルを敷き詰められた路上にキーボードをセットして、準備はそれで終わり。マイクやアンプなんて気取ったものを使うことはなく、と言うか単純に安物の機械を通すよりも生で聴いた方が彼の声も美しくった。そしてまた、彼の澄んだ声は下手な増幅など必要としていなかった。

ビルを背にして立つ私。その一メートル半ほど前に、近くのファストフード店のトイレで着替えた彼の背中。それから、さらに二メートル離れて、弧を描くように観客の顔。夕暮れ間近になると、逆光になって、酷い時には私の位置からだと彼らのシルエットしか見えなくなる。でも、これは絶対に内緒だったけれど、私はその瞬間が何よりも好きだった。丁寧に磨いている白い鍵盤は、いつでも綺麗なあかね色に染まっていた。

バンドを組もうと声を掛けたのは、私だった。理由は簡単だ、高校一年生の学祭の打ち上げ会場として訪れたカラオケボックスで、罰ゲーム代わりに披露された彼の歌声に、一目惚れ、いや、一聴き惚れしたのだ。あまり人前で歌うことに慣れていないにも関わらず、その声はたまらなく甘くて、優しかった。再三の誘いの果てに、彼がようやく頷いてくれ

たのは、それからおよそ三ヶ月近くが経ってからだだった。

他にメンバーを追加するつもりは毛頭無かった。添加物の多い砂糖菓子なんて美味しくないように、彼の歌声を支えるのはシンプルな音色のみで十分なのだから…。

…なんて言うのは、言い訳で。本当は、もっと単純に、彼と二人きりでいたかっただけだった。

詰まる所、私にとってはバンドなんて所詮、ただの理由付けに過ぎなかった。だって私は、ピアノが好きで、彼の歌声が大好きで、そしてそれ以上に、彼自身を想っていたのだから。声をきっかけに始まった恋は、とっくに本物になっていた。

だからこそ、私たちが上手くいかなくなるのは、きっと自然な流れだった。

ある休日、彼が常連の観客であった女の子の一人と仲よさそうに街を歩いている光景を目の当たりにした時、私はまず裏切られたと感じて、その直後にとうとうこの瞬間がやって来たかと悲しくなった。

お世辞にも、私は「魅力的だね」なんて言われない。ピアノの技術を認められることこそあれど、私自身を褒められることはない。

でも、それは仕方ないことなのだ。自分でも分かっている。ずっとピアノの練習と勉強ばかりしてきて、人並み程度には流行や恋愛にも興味を持ってきたけれど、それは言ってみれば地味な女の子を基準としての話で、だからそんな私が華やかな青春の主役になれるはずもない。

今更慌てて周りを追いかけた所で間に合いそうにない私にとって、辛うじて誇れることはピアノしかなかったし、言い換えれば今すぐにも使える武器がそれだった。だから、彼と一緒にいる為にバンドを結成しようと頑張ったことは、回りにくい逃げだと言われたとしても、せめてもの努力だった。我ながら面倒くさい女だと呆れるものの、面と向かって伝えられない気持ちは、いつも全身全霊で曲に込めた。もしも、私が女性目線の歌詞を書いてしまったら、きっと間違いなく、他の誰のことも全て無視して、ただただ彼だけに届けば良いなんて一方的な作文にしかないだろう。或いは、一緒にいられて幸せで、それだけで十分だと思っていたくせに、身勝手に恨みがましい文章をつらつらと書き連ねることしか出来ないか。

「日曜さ、ちよっと出かけないか」

木曜日の放課後、いつもの道を歩きながら不意に言ってきたのは彼だった。

「歌う場所を変えるってこと？」

「いや、そんなんじゃないでさ。単純に、遊びに行こうって話」

私はそれに内心でどきりとしていたくせに、発せられたのは「…何で」。

本当に、どうしてこんなにも色気のない返答をするのだろう。男性側に立った歌詞を書くくせに、いつまで経っても私は男の子が好むであろう態度を取れない。

「駄目か」

「別に、駄目じゃないけど」

「ならさ、良いだろ」

「……………」

いつになく積極的な彼を眺めながら、一体、何を考えているのだろうかと思った。バンド活動に関してならばともかく、こんな提案は珍しかった。

けれど結局、まるで普段通りに笑う彼の様子から何かを察することなど出来なくて。「：分かったわよ」

もしかしたら、本当にふとした思いつきなのか、だとしたら、それはきっと、私にとつて幸せなことなんだろう。

「じゃ、決定な」

軽い口調で応える彼を横目で盗み見つつ、これはもしかして初めてのデートなんじゃないかと、遅まきながらようやく思い至っていた。

当日はよく晴れて、喩えて言うなら絶好のデート日和だった。私は昨夜からスカートにするかパンツルックにするか悩んだ末に、ちよつと短めのスカートにストッキングという選択をした。スカートの下は生足が一番で、逆にレギンスやカラータイツなどは著しく男受けが悪いのだと、以前にクラスメイトの女の子がぼやいているのを聞いていたけれど、あまり自信のない身としてはそれが精一杯だった。彼女曰く、「男は馬鹿だから、1%の可能性にもすがりたいのよ」、だそうだ。ちなみに、上はしばらく前に一目惚れしたレースのシャツを着て、そこに袖の短めな単色のベストを合わせた。靴はカジュアル・ブランドの新作ショート・ブーツを姉に黙って靴箱の中から借りてきた。それ一足で、服からカバンまで今日の私の全てを賈えるものだ。

電車の都合で約束の時間よりも十分ほど早く、待ち合わせ場所の駅に着くと、彼はすでに改札の外で待っていて「よお」。

膝の上が白くなったデニムのパンツに、襟元を開いたボタンダウン・カラーの白いカジュアル・シャツ。靴だけは新しそうでスニーカー。シャツの裾の下に隠れた手をポケットに突っ込んだまま、彼はまるで普段通りの口調で「早かったな」と言ってきた。

正直、ほとんどいつもと変わらない格好に、なんだか自分ばかりが気合いを入れて馬鹿みたいだと情けなくなりつつも、私はちゃんと平静を装って「そっちこそ」と返した。

「電車の時刻表に言ってくれ。遅れるか早く着くか、どっちかしかなかったんだよ」

「私もよ」と答えながら、鉄道会社が違っても電車の発着時刻は似たり寄ったりなんだなと思った。ちなみに、待ち合わせに私の利用する私鉄の駅を指定してくれたのは向こうで、彼は本来、JRの路線をメインに使っている。

「じゃ、行こうか」

と、そう言うのと彼はいきなりポケットから手を抜いて、つい今し方に私が出てきたばかりの改札へと向かって歩き出した。しかも、ずっと握りしめていたのだろう、よれよれに折れ曲がった切符を持って。

「え、また入るの？」

「定期持ってるんだし、良いだろ」

「いや、そういう問題じゃ無くてさ」

それならわざわざこんな場所で落ち合う必要など無かったんじゃないかと思つたものの、彼があんまりにも平然としていたから、「：まあ、良いけどさ」。

「ほら、早くしろよ。電車、もうじき来るぞ」

「まだ待ち合わせ時間にもなっていないんですけど」

「良いから良いから」

彼は振り返ってくれるどころかまるで歩調を緩める様子もなく、さっさと改札を抜けてしまう。べつと吐き出された切符を勢いよく掴んだ彼の姿に、それはそうと今日は一体何処へ行くつもりなんだろうかという疑問は、どうやら聞くだけ無駄そうだと悟った。

私たちは、先ほど私が降りたプラットフォームの端に立っていた。

実を言うと、私としては彼から何か話題を振って欲しかったのだけれど、この鈍感男は五分後にしかやってこない電車を誰よりも先に見つけようとはばかりに線路の彼方を眺めていて、一向に二人の間にある微妙な距離が言葉で埋められる気配はなかった。

まったく、普段はしれっとした顔で甘々あまめまの詞なんか書いたりするくせに、どうして「その服、似合ってるよ」の一つくらいも言えないのか。：まあ、私も偉そうなことは言えないのだけれど。それでも、たった一言でも彼が私を褒めてくれたなら、きっとそれだけで今日一日を幸せに過ごせる気さえするのに。

結局、ようやく電車が到着するまで彼が喋ることはなく。「足下、気をつけるよ」。でも、おそらくは無自覚なんだろうけれど、さりげなく発せられた一言が優しかったから、とりあえず許してあげようと思った。

休日の昼下がり。車内は割と空いていて、座席の上に膝を立てて車窓からの景色に騒ぐ子供がいなければ、傍らの乗客と大声で談笑する大人もおらず、ほとんどの乗客は、静かに雑誌を読むか、かちかちと手元の携帯電話を操作しているか、或いはクリーム色の天井や焦げ茶色のリノリウムなんて見飽きたとばかりに目を閉じている者ばかりだった。

「座る？」

その問いかけに、「ううん」と返したのはどうしてだったのか。

「そっか」。彼もまた、それにあっさり頷くと、やがて入ってきた扉の向かい側にある扉にもたれて「良い天気だもんな」と言った。

ああ、本当だと、私は声に出さず首肯した。窓の外では明るい陽光に照らされて、高架線と並行して走る車がどれも新車みたいにきらきらと屋根を輝かせていた。

いつしか、私たちは自然と言葉を交わしていた。

「あ、知ってる？ミチコが告白したって」

「へえ。誰に？」

「四組のニシナくん。とりあえず今度デートするって」

「え。けど、あいつ確か彼女いるぞ」

「嘘、それ本当？」

「いやまあ、改めて聞かれると、多分だけど」

「どうしよ…。教えてあげた方が良いかな」

「…うん。止めといた方が良いんじゃない」

「どうして」

「もしも俺たちが間違ってたなら、余計にややこしいだろ」

「けど、もしも二股だったら？」

「その時はその時で、それも青春だって。って言うか、先に潰すより、後で力になってやれよ。そっちの方がさ、なんか、青春っぽいじゃん」

「いや、青春って…。あのさ、一つ聞くけど、言ってるて恥ずかしくないの」

「人前で歌うことに比べたらマシだよ」

なるほど、それもそうだ。思わず納得してしまうと、彼は勝ち誇った風に「ほらな」と笑ってから、「そう言えばさ」。

「何？」

「もうじき、夏休みだよな」

「どうしたの急に」と答えつつも、内心ではいきなりの話題転換に少なからず戸惑っていた。確かに、彼の言う通り、あと半月もすればテストがあつて、それが終われば夏休みへ突入する。だけど、それはむしろ敢えて避けていた話題だった。

「カシとバンドを組んで、もうじき半年か。それでオリジナル曲が十曲つて、結構なペースだよな」

「そうかな」

「そうだよ」

「なら、そうかもね」

「凄いやと思うよ、マジで」

「私が？」

「俺には曲を作るなんて出来ないから」

「勉強すれば、出来るよ」

「かも知れないけど。それでも、やっぱり同じようには作れないさ」

そう言つて浮かべられた彼の表情は、笑つていたものの、仄かに寂しそうにも見えた。だから私は思わず、「じゃあさ、次の曲はそっちがやってみる？」。

「止めとくよ」

でも、返ってきた言葉はやんわりとした否定で、それから冗談めかした口調で「ただでさえ中間テストで一杯一杯なのに、これ以上の勉強は無理だし」。

「普段から真面目にしとけば良いのに」

「それって、普通は生徒側から出ない発言なんだけどな」

彼の苦笑じみた顔を眺めながら、私は呆れ風味の笑みを浮かべる。

まさしくいつも通りの光景で、何も変わっていない関係だった。少なくとも、私はそう思っていた。

向かい側の、或いは私たちが立っている方の扉が何度目かの開閉を繰り返した頃、車窓からの景色に変化が現れた。

電車に乗ってから、二十分弱。よその土地なんて観光地くらいしか知らないけれど、ちらほらと船が見える海沿いの地方都市は、それなりに活気のある方だろうと思っていた。

「次で降りるから」

と、唐突に彼。

「海に行くの？」と尋ねると、彼は肩をすくめて見せただけだった。

その駅のプラットホームは少しばかり都会的で、あまり情緒的とは言い難かった。でも、その通路に並ぶ窓からは立ち並ぶコンクリートの先に白い砂浜と青の上に銀箔を散らされたような海が見えて、自然と胸が弾んだ。

駅前のロータリーは改装されたばかりなのか、真新しいアスファルトが印象的で、数台のタクシーとバスが並んでいた。

だけど私たちは当たり前のようにそのまま歩き出した。駅から浜辺へと続く道中には、他にも中高生らしき男女がいた。途中、先ほどのバスが追い抜いていったが、私たちの歩調が変わることはなかった。

幅広の国道を外れて、海産物とはあまり関係なさそうな日用品や雑貨品が売られている商店街を抜け、そうしておよそ十五分。街の中とは明らかに異なる香りを楽しんでいた私たちの前に、コンクリートの堤防が見えてきた。

ざらついた階段を上って堤防を越えると、まばらな人影と幾つもの足跡が散らばる砂浜が見えた。海の中にまで入っている人間はいなかったものの、波際からは時折、楽しそうな声が聞こえてきた。

「降りようぜ」

彼はそう言うのと、こちらの返事を待たずに砂浜へと進んでいった。

私はほんの束の間、借り物の靴が汚れるかもと考えたものの、すぐに彼の後を追った。今のこの瞬間を楽しめるのならば、姉に怒られることも仕方ないと思った。

しばらく、波と平行に歩く私たちの間に会話はなかった。彼は後ろを振り向くことはなかったし、私はその背中をいつもの距離を開けて追いかけていた、目の前に新しく生まれる足跡に、こっそりと自分の足を重ねたりしながら。

「俺さ」と、いきなり彼が声を発してきた。やっぱり顔は前を向いたままで、歩みも止めずに。

「どうしたの」。私もまた、そのまま返した。口を開けた直後、潮の飛沫が風に運ばれてきて、ほんのかすかにしよっぱかった。

「付き合おうと思ってる子がいるんだ」

瞬間、私は足を止めて、「え」と漏らしていた。ただ、その声が彼にまで届いていたのかどうかは定かでなかった。

さらに三步ほど進んでから、彼もようやく、足を止めてこちらを振り返ってきた。私たちの間には、まるで演奏者と観客みたいな距離が開いていた。

「たまに聴きにきてくれてた子なんだけどさ」

「…………」。私はこの時、何と応えていたのだろう。幾つもの言葉が浮かんではいたけれど、そのどれを声に乗せていたのか正解はまるで分からなかった。

「こないだ、初めて二人で出かけてさ」

「…………」

「つて言っても、遠出とかじゃなくて本当に近場なんだけど」

「知ってる」

「え」

「たまたま、見たから」

「そっか…」

「うん」

「どう思った」

「え…」

それこそ一体どういう意味なのか。

私が答えられないでいると、彼はややあって申し訳なさそうに、「ごめん。変な質問だ

ったな」。

「どうして、謝るの」。思わず聞いた。

返ってきたのはおそろく意図的に変えられた話題だった。

「前から聞きたかったんだけど。カシってさ、プロになりたいの」

「どうしたのよ急に」

「急じゃないさ。前から思ってたんだって。ただ、言わなかっただけで」

「それってつまり急じゃない」

「まあ、そうなんだけど」

「そんなこと、考えたこともないよ」

それは半分本当で、半分嘘だった。

「そっちはどうなのよ」。そう尋ねると、彼は少しばかり考えた風にした後で、「あんまりぴんと来ないな」と笑った。

「俺って、ほら、何て言うかお前について行ってるって感じだから。俺一人じゃ、多分、まるで意識なんかしてなかったよ」

私だって、自分一人じゃこんなことをしようなんて思わなかったよ、と言ってやりたかった。プロだとか、将来だとか、そんなことなんて本当はどうでも良かった。その一方で、もつとずつといつまでも二人で続けていられれば幸せだと願っていた。だからこそ、プロを目指すことがその条件であるのなら、そんな選択もありだった。勿論、そんな程度の意識で本物のプロになれるほど甘い世界だなんて、それこそ考えてもいけないけれど。

「止めたいの？」

意識せず口からこぼれた問いかけに、私は驚いた。でも、不思議と後悔はなかった。

「カシはどう思う？」

「私は、止めたいなんて思ってないよ。演奏してるのとか、割と好きだし」

「俺も楽しいよ、それは本当。最初は緊張したけど、お客さんに目の前で喜んでもらえるって感触は、鳥肌が立つくらいに気持ちいいし。それに、お前が後ろにいてくれるのは頼もしいし」

「じゃあ、続けたいの？」

「カシはどう思う？」

「：さつきから、そればかりだね」

「……………」

「珍しく出かけようなんて言ってきたり、いきなり他の子の話をしたり、そうかと思っただけでプロがどうか。そっちこそ、何考えてるのよ。悪いけど、わかんないよ、全然」

言葉を並べながらも、あまり深刻そうにならないように、私は口調を軽く努めていた。表情だって苦笑いみたいなものを意識していた。

「だけど、きつとそれらはあんまり成功していなかったのだろう。」

彼は不意に真剣な、まるで見たこともないくらい目の眼差しをして、「男はさ、お前が書く歌詞ほど、素直で賢くはないかも知れないけど。でも、だからって鈍感なやつばかりでもないんだよ」。

「どういう意味よ」

「俺さ、カシが好きだよ。ピアノもそうだけど、それだけじゃなくて、カシ自身も」

思いがけない反応に、続けようとしていた全てが真っ白になった。

「だけど、それは友達として、仲間としてって感情なんだ。もしくは、家族みたいな」
そして直後に、そこは色さえも失い、無になった。

「プロの話とか関係なく、出来ることならずっと面白おかしく一緒にやっていきたいって、それが出来たらどんなに楽しいかって、思ってた」

「……………」

「でも、その時に気付いたんだ。その為には、俺はお前を女としてじゃなくて、仲間として見なくちゃならないって。それで、それで正しいんだって」

「…どうして」

「だって、男と女じゃ、いつか終わってしまうだろう」

「そんなこと分からないじゃない」

気付いたら、私は彼へと一歩、近づいていた。彼はそこに立ったまま、表情も変えなかった。

「分かるよ」

返ってきた声音すら、悲しいくらいにいつも通りの優しさを帯びていた。「だって、だから今、こんな風になってる」。

私は何かを叫ぼうとした。でも、その寸前で口を閉じた。だってそうしなければ、きつと泣いていた。

彼は私から遠ざかることを誤魔化す風に、波打ち際へと歩き出した。私は少し遅れて、それに続いた。

「本音を言うと、あの子のことを本気で好きだってわけじゃないんだ。マジで酷い男だっと思うよ。でも、一つだけ言い訳をさせてもらえるなら、向こうだって俺を好きってより、あそこで歌ってる俺が好きなんだよ」

「…付き合うの？」

発せられた声は、努力をあざ笑うかのように震えていた。だけど彼はとても静かに「多分ね」と返してきた。彼は靴が波に濡らされない所で足を止め、私もまたそれに倣った。私の中で、彼の横顔を見てみたい気持ちと、今の自分の顔を彼に見られたくない気持ちがぶつかって、結局、私はずっと色の違う砂の境目をじっと見つめていた。

「そんなに長続きしないだろうけど。ただ、もしかしたら、付き合ってから好きになっていけるかも知れない」

「最低ね」

「自分でもそう思うよ」

「私は、サトウが歌っていても、いなくても、関係ない」

「知ってた」

「…最低ね」

「本当に、そう思う」

その瞬間、怒りがわいてきた。こんな時にもこちらを思いやっているみたいな口調で話す彼が、無性に許せなくなつた。そしてそれ以上に、それでも諦められない自分自身が、情けなくて仕方なかった。それならせめて、大声で泣けたなら、どれほど楽だっただろうか。

「何て言うかき、タイミングって言うか、潮時ってあるんだよ」

何それ、シヤレのつもりですか、だとしたら笑えないんですけど。胸の中で吐き出した。私の奥に溜まっていた毒素が一緒に溢れてきて、まとわりつかれた心臓が悲鳴を上げた。

「私は、サトウの声が好き。サトウだって、私のピアノ好きなんですよ。だったらそれで良いじゃない。ずっとさ、面白おかしくやってこうよ、一緒に、一人でさ」

それは精一杯の勇気を振り絞った結果で、同時に、最後の悪あがきだった。頭の片隅にある冷静な部分、とても静かにそのことを教えてくれた。

果たして、彼は、彼の方こそ今にも泣きそうな声をして、「ごめん」と言った。

何も応えられない私の耳に、それからもう一度、「勝手なことばかり言って、ごめん」と届いてきた。それで、私はいよいよ何も言えなくなってしまうた。そんなこちらの感情を知ってか知らずか、伝わってくる彼の気配はとても辛そうなものだった。その優しさこそが辛いのだと、私は声に出せない本心をきつく奥歯で噛みつぶした。

会話が無くなっても、私たちはどちらも動かなかった。砂の境界線が、いつの間にかもうつま先のすぐ前にまで迫っていて、このままだと濡れるなど、また冷静な頭が他人事みたいに予測した。するとついでお姉ちゃん怒った顔が浮かんできて、どうしてかその説教が無性に恋しくなった。

「俺、行くよ」

唐突に彼が言った。僅かに砂に沈んだ彼の足は、こちらの返事を待っている風だった。だから私は、いつそのことこのまま永遠に黙っていてやろうと思っ

「……うん」

とても小さく頷いた。

彼はそれからまだ少しの間だけそこに立っていたけれど、やがて本当に歩き出した。どんな顔をしているのか、私は最後まで確かめられなかった。

こんな状況になってもまだ、心の片隅では立ち止まってくれるだろうと、あんなことを言いながらも結局は振り返ってくれて、そして謝ってくれるだろうと、そんな考えも抱いていた。たとえ「好きだ」と言われなくとも、もう一度、仲間としてでもやり直そうと尋ねてくれるに違いないと、願っていた。

「………大嫌い」

口に出してしまえば、或いは本当にそうなるかも知れないと思っただけなのに。胸にわいてきたのは、ただただ悔恨だけだった。急いで振り向いたものの、もう彼の背中は何処にも見えなかった。せめて最後の最後まで、優しくなんてしないでくれたら良かったのにと、私は彼のものであるう足跡を睨み付けて、睨み付けて、睨み付けて……握った拳で太ももを何度もたたいたのは、少しでも痛みを紛らわしたかったからだだった。泣いたら負けだと、絶対にあんな男の為に泣いてやるもんかと、歯が割れそうなくらいきつく口を閉ざして……

……でも、そんなにも一所懸命に頑張った所で、私にはもう勝ち負けを競う相手すらいなかった。強いて挙げるとすれば、あの名も知らぬ女の子だろうけれど、だとしたらとつくに負けている。

気付いたら私はその場にしゃがみ込んでいて、泣いていた。ただ、それでも目は閉じていなかった。きつと端から見れば馬鹿みたいの不細工な表情で嗚咽を漏らしながら、それでも必死に両手で顔を覆いたくなる衝動に耐えていた。

苦勞して作った飴細工が割れるように、始まるまではあんなに頑張って、それからも沢山頑張って、なのに終わる時はこんなにも呆気なくて。だけど世の中なんでもしかしたらそんなもので。だからむしろ、例えばここで格好良く持ち歌でも歌って、すんと軽く鼻を鳴らしただけで波打ち際を歩けたりすれば、きつと映画のワンシーンみたいで少しはこんな惨めな状況も華やいでくれるのかも知れないけれど、残念ながら私はそんなに強くなくて、ましてや歌だって上手くなくて。

だからとりあえず、頭に浮かんで来るままに、あの甘い日々を思い出しては文法も旋律もでたために吐き出し続けた。そうすればいつかは、胸の中にあるどろどろに溶けた何かも無くなってくれるはずだと期待しながら。

ちらほらと人のいる砂浜で、恥も外聞も無く、大きく息を吸い込んで、しゃっくりの隙間に単語を並べて。

一人きりの舌に感じる現実、少し苦くてしよっぱかった。

〈了〉